

「小さな新聞記事から広がる大きな可能性」

今回、コラムを担当することになり、数ヶ月前に見つけた、新聞の小さな記事を思い出しました。確か、アメリカの公共図書館で、3Dプリンターを使って義手が製作されたという内容だったような・・・

記憶をたよりに調べてみたら、「カレントアウェアネス・ポータル」(図書館界、図書館情報学に関する最新の情報をお知らせする、国立国会図書館のサイト)に、以下のような記事の紹介がありました。

「3Dプリンターで少女の手に義手を(米国)(記事紹介)」

「娘のための義手を探していた両親が、3Dプリンターを使って義手などを作成することに取り組むボランティアコミュニティのウェブサイトで義手のデザインを見つけ、同じウェブサイトに3Dプリンターが使用できる場所のリストがあり、住んでいるところから一番近い図書館を探し、同館のイノベーションラボで義手が制作された。市販の義手であれば、5,000~6,000ドル必要なところ、全体の費用は100ドル以内に収まったとのことです。」

同サイトには、長野県塩尻市立図書館での3Dプリンターの利用も紹介されていました。

ふと見つけた小さな新聞記事をきっかけに、単に本を貸すだけの場所ではなく、市民の発想を支援し、応援する役割として、これからの図書館ができることを考えさせられる出来事でした。(I)